

# 日語學習者及教師對常體會話教育的意識調查 —以 A 大學日文系為調查對象—

中村直孝

東吳大學日本語文學系博士生

## 摘要

本論文對常體會話教育的必要性，針對台灣的 A 大學日文系的學生及教師以問卷的方式進行研究，並將其結果與考察提出。調查結果可知，雖然相較於常體會話學習者與教師皆較為注重敬體會話，但對常體會話的學習動機較高，在人際關係建構上，常體會話較敬體會話更為重要。

此外，敬體會話學習後加入常體的會話較為適切，故可知大學的日語教育中常體會話的課程是有其必要性，由此結果在大學日語教育中，中級以上的日語課程需加入常體的會話。

關鍵詞：常體會話、意識調查、學習意欲、大學日語教育

受理日期：2017.03.10

通過日期：2017.05.05

# **Attitude Survey of Teaching Plain-Style Conversation: With Students and instructors at A university As the Target**

Nakamura Naotaka

Ph.D.Student, Soochow University, Taiwan

## **Abstract**

The purpose of this study is to clarify the needs of teaching plain-style conversation in Japanese education at university in Taiwan. In this study, the attitude survey of students majoring Japanese language and instructors was conducted in A university.

The results of a survey show that both of students and instructors consider the following.

1. Both of students and instructors basically think formal-style conversation is more important than plain-style conversation.
2. Especially in building a personal relationship, both of students and instructors think plain-style conversation is more necessary.
3. Both of students and instructors think plain-style conversation should be taught after learning formal-style conversation.
4. Both of students and instructors hope that plain-style conversation to be included in university course.

Considering the above, this paper suggests that Japanese education at university adopts teaching plain-style conversation in intermediate class or higher than intermediate.

Keywords: Plain-style conversation, Attitude survey, Motivation to learn, Japanese education at university

# 普通体会話教育に対する学習者・教師の意識調査 — A 大学日本語学科を調査対象に —

中村直孝

東呉大学日本語文学科博士課程

## 要旨

本稿は、普通体会話教育の是非を検討するため、台湾の A 大学日本語学科の学習者と教師を対象に質問紙による意識調査を行い、その結果と考察を報告するものである。調査した結果、学習者、教師ともに普通体会話より丁寧体会話のほうを重要視しているものの、普通体会話に対する学習意欲は高く、人間関係構築においては丁寧体会話より普通体会話が重要だと考えていることがわかった。また、丁寧体会話を学んでから普通体会話を導入するのが妥当であると考えていること、大学でも普通体会話の授業を望んでいることなどが明らかになった。こうした結果から、大学教育でも中級以上で普通体会話を取り入れることを提言した。

キーワード：普通体会話、意識調査、学習意欲、大学日本語教育

# 普通体会話教育に対する学習者・教師の意識調査

## — A 大学日本語学科を調査対象に —

中村直孝

東呉大学日本語文学系博士課程

### 1. はじめに

時折「自然な日本語」「学校の先生ではなく、普通の日本人が話すような日本語」を学びたいという学習者からの声を聞くが、多くの場合、それを指すのは非正式な場面で親しい人の間で交わされる普通体会話である場合が多い。しかし、敬語のような待遇表現については初級から学習項目として取り入れられているのに対し、口語的で規範性が低い語彙や文法は、教育するべき内容とはみなされていないことが多く、実際に系統立てて教えられることは少ない。台湾における大学教育の現状を見ても、普通体会話が体系的に教えられることは例外的のようである。しかし、学校で教えられなくとも、学習者はドラマやアニメなどで普通体会話に触れる機会も多く、特に留学などを経験を通して普通体会話を話す学習者も出てくる。中には教師に対して普通体を使うなど不適切な場面での使用も観察されることもあり、普通体会話の教育について積極的ではない教師もいると考えられる。

こうした状況はよく見られるものの、石川(2012)でも指摘されているように、普通体会話に関する研究はまだ十分とは言えない。どれだけの学習者が普通体会話教育を実際に望んでいるのか、またどのような形を想定しているのか。あるいは、教師側は普通体会話に対してどういう態度をとっているのかなど、調査する価値があると思われる。本稿では、普通体会話教育の是非、またはその時期、順序、方法などについて提言することを目的とし、質問紙調査を通して、普通体会話教育に対する教師・学習者の意識を明らかにしたい。

## 2. 普通体会話について

本稿では、普通体会話を「親しい友人や家族などと話す際に使う普通体基調の対話」と定義する。普通体基調会話、くだけた会話、ため口、カジュアル会話、インフォーマル会話などと呼ばれることもある。

普通体会話、特に普通体会話教育に関する先行研究はそれほど多くない。石川（2012）では、普通体会話に関する研究論文として20本の論文を挙げているが、そのほとんどはジェンダー、スタイルシフト、談話や会話分析などの各論的なもので、日本語教育への応用に関しても各領域からの提言に留まっている。全般的な普通体教育や習得を主題としているものについては、管見の限り、増田ほか（2006）や石川（2012）などに限られている。ここでは、普通体会話の教育全般に対する言及のあるものを中心に先行研究を概観する。

因・王（2007）では母語話者の普通体会話の使用を分析した結果、同じ普通体でも相手向けか自分向けかによって使用許容範囲が違ふことや、親密さの表出にも社会上位者と下位者では選べる表現ストラテジーが違ふことなどが観察されたとしている。こうした語用論的運用力の養成は日本語教育の重要な責務の一つだとしており、①多様な発話サンプルを系統立てて、②文脈における解釈とそれを生み出す原則についての情報を提示することを提言している。

増田ほか（2006）では、研究留学生（初中級）を対象に普通体会話教育の実践を報告している。研究留学生は重要度の高い会話については英語を使うので日本語は必要ないが、「研究室コミュニティ」に入っていくためには日本語が必要であり、普通体会話をサポートすることは重要であると述べている。中級学習者の普通体会話の問題点について、①スピーチスタイルの不安定さ、②形態の選択ミスにより意図せずに与える印象、③音声コントロールの難しさ、④使用域の誤解、を挙げており、①形態、音声、使用域の3つを合わせて扱う、②一文の置き換えにとどめるのではなく、文脈のあるディスコースでまとまりとして練習させる、③普通体会話の自然さ・不

自然さを見極める観察力をつけるという3点が普通体会話教育の重点であると述べている。

石川（2012）では文体が示す要素の使用適切性及び会話の技巧に関する認識を行った結果、有標となる表現に気づいた学習者は約半分であり、有標性に気づいた学習者もその解釈は母語話者と異なることが多かったという。そこで、普通体会話教育で取り上げるべき項目として、下記の5項目を挙げている。

#### 1) 丁寧体と普通体間の平行性が成り立たない形式

「普通体+か（疑問）」「てくれ（依頼）」「だろう（確認要求）」などの単に普通体に移行しただけでなく、その社会言語学的な意味合いも変わってしまう形式で、特に女性に注意が必要となる。

#### 2) 男性的表現、女性的表現、中立的表現の区別と用法

現行の日本語教育では中立的表現を増やす傾向があるが、実際の日本語には依然として男性的／女性的表現が存在する。学習者に男性的／女性的表現の使用は求める必要はないが、母語話者の会話を適切に受信できるようにするために、男女差の提示は必要で、排除すべきでない。

#### 3) 丁寧体と普通体の多様な用法と意味

従来の「丁寧体はフォーマルな場面で、普通体はインフォーマルな場面で使う」「丁寧体は目上に対して、普通体は同等・目下に対して使う」「丁寧体は丁寧な態度を、普通体はくだけた態度を示す」以外の捉え方も必要となる。例えば「そうですか」と「そうか」の関係は、「他者向け／自己向け」という視点を取り入れる必要があるし、普通体基調の会話の中で丁寧体を使用すると心理的な突き放しを示し、丁寧体基調の会話の中で普通体を取り入れると心理的な近づきを表すなどの「距離化／脱距離化」などについても取り入れるべきである。

#### 4) 非公式な場面に相応しい表現形式／非公式な場面により特徴的な表現形

文型や接続形式などは教科書や文法解説書にフォーマルかどうか

の記述があるが、語彙の場合は辞書にすべての語にフォーマルかインフォーマルか記述されているわけではないので、学習者は不自然な発話をしてしまうことがある。また、母語話者が本来とは異なった文体で技巧として用いた語彙使用の意味合いを受け取ることが難しい。様々な事例を紹介、解説することで、学習者にこうした技巧に対する意識を向けさせるべきである。

#### 5) 他人格モード

技巧の一種で自分とは違うアイデンティティが指定するものではない文体形式を用いて、一時的に自分でない誰かのふりをするのである。例えば女性が「～だがね」「～するなよ」のような形式を用いて、自分とは違う属性を装うことで発話を面白おかしくしつつも本心を伝えるような技巧のことであり、日本語の表現方法の一つとして明確に意識させる必要がある。

以上、述べた研究では、母語話者同士の会話を分析したものや、日本での言語環境で生活する学習者を対象としたもので、JFL (Japanese as Foreign Language: 外国語としての日本語教育) の環境下での応用については、言及されていない。

### 3. 普通体会話をめぐる論議

この節では、先行研究を引用しながら普通体会話を日本語教育の対象とするべきか否かの観点をまとめ、その論点と理由を明確にしたい。1)～3)は普通体会話導入に賛成の論点であり、4)～6)は反対の立場からの論点である。

<普通体会話を日本語教育の対象とするべきとする考え>

#### 1) 学習者が必要としている

まず、実際によく使われる言葉を教わっていないという学習者の不利益が考えられる。学習者の接する日本語のうち、どのくらいの割合が普通体会話なのかは不明だが、学習者の状況によってはかなりの割合を占めていると推測される。堀口(1989)では「何してんの」という日本語が理解できなかつたり、「宿題はいつまでにやらな

ければなりませんか」と話しかけて変な顔をされたり笑われたりした学習者の体験が紹介されているが、こうした状況を多くの学習者は経験しているのではないだろうか。

高村・内藤（2015）では関西方言に対する短期留学生の意識を調査したところ、「関西方言に好意的」「大学や自然習得で関西方言を勉強したい」と考えていることがわかったという。方言も親しい人との間で使うだけであった会話だと考えれば、普通体会話に非常に近い存在であり、普通体会話についても同じような結果が予想される。

西口（2008）では、在住外国人はある程度限られた日本語話者との個人的な交流を継続的に続けることで、日本語力を習得しようとしており、実は学習者が求めているのは生活上に必要な「生活日本語」ではなく、「おしゃべり日本語」であるとしている。限られた日本語話者との個人的な交流で使われる「おしゃべり日本語」は、多くの場合普通体会話であることが考えられ、こうした意味でも学習者にとって普通体会話の必要性は高いと考えられる。

小川（2004）では、普通体会話で重要な位置づけとなる性差について、不適切な「男言葉」「女言葉」は相手に対して不快なものになると述べており、こうした面においても適切な指導が期待される。

## 2) より良い人間関係を構築するのに必要

富阪（2005）では学習者が丁寧体を使い続けることは、相手を怒らせることはないとしても、なにか居心地の悪さを感じさせると述べているが、外国人日本語学習者であることを考慮しても、適切な普通体会話を使っていないことは、やはり人間関係の構築<sup>1</sup>に影響を与えることは容易に想像できる。梅岡・宮城（2004）では、語彙、文化的側面に関する問題、表現や発話の運び方など、多元的な領域が、母語話者とのコミュニケーションに少なからず影響を及ぼしているとしている。山下（1989）では、親しみを見せるという敬語と反対方向の待遇表現に対しては、現在の日本語教育では配慮を欠い

---

<sup>1</sup> ここでは、その場限りのコミュニケーションではなく、継続的な協力関係を築き、良好な感情を互いに持てるような関係を作り上げることを指す。



ており、片手落ちだと指摘している。

### 3) 実際の日本語接触場面の变化

台湾のようなJFL環境における普通体会話の需要増加を促進させている環境の変化が認められる。まず、日本のアニメ、漫画が普及してきたことが挙げられるだろう。アニメや漫画で使われている対話は普通体会話である場合が多く、そうした言語接触により普通体会話の需要が増大することは容易に想像できる。また、個人交流が盛んになってきたのも普通体会話の需要増加の原因と考えられるだろう。台湾の高校で行われている「教育旅行」などでの学校間交流、大学などの学校主催の交流活動、SNSや語学交換を目的としたサイトなどの利用、LCCなどの安価な航空券が手に入るようになったことなど、個人交流を強化させるような変化が相次いでおり、同年代同士の交流の場で互いに親しくなる機会が増えれば、当然普通体会話が必要になると考えられる。

<普通体会話は教えなくてもいいとする考え方>

### 4) 学習者の不利益となる可能性がある

古い文献ではあるが、小出(1972)では、普通体会話について「あまり練習をしないほうがいい。練習すると乱用する」と述べられているが、目上の人との会話や面接などの場面で、普通体会話を使った場合、学習者にとって不利益となることは明らかであり、今日の教師にとっても普通体会話のような文体を教えることは、そのリスクを考えてしまうのはごく自然であろう。早野(2008)では日本語学習者の方言学習について述べているが、日本語社会では場面にあった言葉の使用が求められており、文体が低い言葉は使い方を誤ると、人間関係に悪影響を及ぼしたり、人格を否定される危険性を指摘している。

### 5) 普通体会話は自然に習得できる

普通体会話が日本語教育に確固たる地位がない理由の一つに、教える必要がなく、自然習得が可能だという考えがある。梅岡ほか(2004)では、教師にも学習者にも自然な日本語は「自然と習得す

るもの」という意識があると述べられており、小出（1972）でも、「インフォーマルの文法について分からなくても、文末がフォーマルと違う、助詞が落ちることが多い、など、自然にわかるようになるから説明する必要はない」としている。

#### 6) 非規範的な日本語は教育に適さない

学校教育での国語や外国語などは、いわゆる規範的な文体、語彙を学ぶのが普通である。鈴木（2013）では、英語の規範文法が構造主義や生成主義の研究者から批判され続けても 200 年という長きに渡って存在しつづけているのは、適度の非科学性、学習文法の保守性、規範を守り続ける勢力の存在、規範文法市場における需要、取って代わる勢力の不在といった理由があるからだと言われている。

日本語教育の分野でも縮約形などの教科書採用の動きはあるものの、基本的に卑俗的だと捉えられるような文法、語彙については教科書に採用されることはかなり限定的で、基本的に「人前で話す日本語」が教科書の日本語であり、個人同士の付き合いで使うような普通体会話については消極的であり続けていると言っているだろう。

## 4. 調査概要

本調査は台湾北部にある A 大学日本語学科<sup>2</sup>に所属する大学生学習者、及び A 大学日本語学科の日本語教師を対象に 2016 年 12 月から 2017 年 1 月にかけて行われた。大学生学習者に対しては中国語で作成された質問紙<sup>3</sup>を配布・回収する方法で、教師についてはウェブ上で日本語の質問に答える方法で、調査を行った。データの分析は IBM SPSS Statistics version19 を使用した。

なお、大学生 1 年生は日本語学習を始めて数か月であり、丁寧体、

---

<sup>2</sup> A 大学では 1、2 年次に週 4 時間、3 年次には週 2 時間の会話授業が必修科目となっている。また、海外提携校に半年から 1 年の短期留学プログラムが複数用意されており、中国語研修に来ている日本人留学生のチューター（輔導員）になることも可能で、希望すれば日本人大学生に接触し普通体会話に触れる機会は十分あると考えられる。

<sup>3</sup> 実際の学習者向けのアンケートを資料として添付した。

普通体についてまだ履修していないか、履修していても十分な理解ができていない可能性を考え、調査対象とはせず 2～4 年生のみを調査対象とした。

調査対象者の属性については表 1、表 2 の通りであり、それぞれの有効調査対象者人数は 340 人、33 人だった<sup>4</sup>。

表 1 大学生学習者調査対象者

単位：人 括弧内は割合（％）

項目	内訳	人数	割合
性別	女性	289	(85)
	男性	51	(15)
学年	2 年生	133	(39)
	3 年生	135	(40)
	4 年生	72	(21)
在日滞在時間	1 か月以内	250	(74)
	1～3 か月	57	(17)
	3 か月～1 年	21	(6)
	1 年以上	12	(3)
留学経験の有無	なし	30	(89)
	あり <sup>5</sup>	38	(11)
日本語能力検定	N 1	47	(14)
	N 2	119	(35)
	N 3	29	(9)
	N 4	6	(2)
	N 5	1	0
	一年受験せず	138	(41)

<sup>4</sup> 他学科に在籍するもの、同意書にサインがないもの、回答漏れがあるものなどは調査対象とはしなかった。

<sup>5</sup> このうち、留学期間は 1 か月以内が 21 人、1～3 か月が 6 人、3 か月～1 年が 11 人だった。留学教育機関は大学が 19 人、語学学校が 13 人、その他が 6 人だった。

表 2 日本語教師調査対象者

単位：人 括弧内は（％）

項目	内訳	人数	割合
性別	女性	11	(33)
	男性	22	(67)
母語	中国語	18	(55)
	日本語	15	(46)
日本語教師歴	教師歴 5 年未満	1	(3)
	教師歴 5 年以上 10 年未満	7	(21)
	教師歴 10 年以上 20 年未満	17	(52)
	教師歴 20 年以上	8	(24)
年齢	30 代	6	(18)
	40 代	16	(49)
	50 代以上	11	(33)
日本での滞在期間	1 年未満	3	(9)
	1～3 年	1	(3)
	3 年～6 年	7	(21)
	6 年～10 年	6	(18)
	10 年以上	16	(49)

## 5. 結果と考察

調査の結果、学習者の日本語接触の自己評価を表 3 に、学習者と教師の普通体会話に対する態度を表 4 にまとめた。

質問 1 番から 4 番までの「学習者の日本語接触の自己評価」（表 3）は、各質問に対し、「全く同意できない（1）」から、「同意できない（2）」「どちらでもない（3）」「同意する（4）」「全く同意する（5）」の五段階での回答を求めた。なお、この部分については教

師に対する調査は行っていない。

質問5以降の「大学生学習者及び教師の普通体会話に対する態度」(表4)については、二つの対立する態度からどちらのほうにより同意できるかを尋ねる形式とし、左の意見に同意するなら1、右なら5、中間的な場合はその度合いによって2～4から選択するものとした。この13項目の質問については、学習者と教師の双方に調査を行った。ただし、教師に対しても、学習者の普通体会話に対する態度を尋ねる設問とし、例えば学生用には「よく普通体会話を使っている」であったものは、教師用は「学習者はよく普通体会話を使っていると思う」というように改めた。

13項目の質問を「現状と希望」「丁寧体会話との相違」「混合と使用場面の理解」「必要性」「教授方法」の五つのグループに分け検討する。

表3 大学生学習者の日本語接触の自己評価

番号	質問(全く同意できない1⇔全く同意する5)	平均値	標準偏差
1	実際に会って日本人の友人とよく交流している	2.33	1.04
2	FacebookなどのSNSを通じて日本人とよく交流している	2.56	1.08
3	日本語のアニメやドラマなどをよく見ている	3.95	0.98
4	日本語の小説などの本や雑誌をよく読んでいる	3.29	1.03

表4 大学生学習者及び教師の普通体会話に対する態度

番号	質問 (左に同意する場合は1⇔右に同意する場合は5) (Sは学習者向けの質問で、Tは教師向けの質問)	学習者		教師	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
5	S:よく普通体会話を使っている ⇔ T:学習者はよく普通体会話を使っていると思う S:普通体会話はあまり使わない ⇔ T:学習者はあまり使わないと思う	2.82	0.99	3.00	1.15
6	S:うまく使えるようになりたい ⇔ T:学習者は普通体会話をうまく使えるようになりたいだろう S:特に使えるようになりたいとは思わない ⇔ T:学習者は特に使えるようになりたいとは思っていないだろう	2.01	0.94	2.36	1.27

7	S,T:丁寧体会話と普通体会話の違いは文法・語彙など大きな違いがある	S,T:基本的に文体が違うだ ⇔ けた	2.23	1.08	2.06	1.06
8	S,T:普通体会話は男の言葉と女の言葉の違いが大きい	S,T:男女の区別は丁寧体と だいたい同じくらいだ	2.20	0.84	1.94	0.93
9	S:普通体会話はイントネーションが難しい T:学習者にとって普通体会話はイントネーションが難しいだろう	S:イントネーションに難しさは 感じない ⇔ T:学習者はイントネーション に難しさは感じないだろう	2.64	0.98	2.52	1.44
10	S:丁寧体会話と普通体会話が混じってしまいそう T:学習者が丁寧体会話と普通体会話が混合してしまうのが心配だ	S:使い分けはうまくできると思 う ⇔ T:学習者は使い分けはうまく できると思う	2.85	1.05	2.27	1.18
11	S:どんな場面で普通体会話を使えばいいかわかる T:学習者はどんな場面で普通体会話を使えばいいかわかっているだろう	S:どんな場面で使えばいい か分からない ⇔ T:学習者はどんな場面で使 えばいいかわからないだろう	2.55	1.00	3.12	1.36
12	S:普通体会話のほうが丁寧体会話より重要だ T:学習者にとって普通体会話のほうが丁寧体会話より重要だ	S:丁寧体会話のほうが重要 だ ⇔ T:学習者にとって丁寧体会 話のほうが重要だ	3.29	0.88	3.27	0.67
13	S,T:人間関係の構築には普通体会話が必要だ	S,T:人間関係の構築には丁 寧体会話が必要だ	1.97	0.72	2.76	0.90
14	S,T:日本語学習の最初から普通体会話を教えるべきだ	S,T:丁寧体会話の後に教える べきだ	3.61	1.02	3.76	1.06
15	S,T:アニメやドラマを通して学ぶのが効果的だ	S,T:授業で学ぶのが効果的 だ	2.24	1.01	2.48	1.06
16	S,T:実際に友達を作って学ぶのが効果的だ	S,T:授業で学ぶのが効果的 だ	1.93	0.88	1.82	0.81
17	S,T:大学日本語教育でも普通体会話を教えるべき	S,T:大学日本語教育では 教えないほうがいい	2.01	0.86	1.85	0.83

## 5.1 学習者の日本語接触の自己評価

1 番の「実際に会って日本人の友人とよく交流している」という質問には、14%が「同意する」或は「全く同意する」と答えたのに対し、61%が「全く同意できない」或は「同意できない」と答え、平均値は 2.33 であった。2 番の「SNS を通じて日本人とよく交流している」には 20%が「同意する」あるいは「全く同意する」と答え、52%が「全く同意できない」或は「同意できない」と答え、平均値は 2.54 であった。学習者の 5 人に 1 人は教室外での日本語使用を行っているものの、個人交流を積極的に行っていると感じている学習者は半数に達していないことがわかった。

映像や文字媒体との接触については4番の「日本語の本や雑誌をよく読んでいる」という質問に対し、42%が「同意する」あるいは「全く同意する」と答え、22%は「全く同意できない」或は「同意できない」と述べ、平均値は3.95であった。3番の「日本語のアニメやドラマなどをよく見ている」に対しては「同意する」あるいは「全く同意する」と答えたのは73%に上り、「全く同意できない」或は「同意できない」と答えたのはわずか8%であり、平均値は3.29に上った。こうしたことから、教科書で使われていない日本語に接する機会は十分あるのが主流であると読み取れる。

こうしたことから少なくとも学習者自身の意識では、普通体会話などを含む実際に使われている日本語は、映像や文字から受動的に接触する機会は多いが、一方自分が実際に使用し、積極的に使うことはまだ少ない。つまり、インプット（受容）の蓄積はあるものの、アウトプット（産出）は少ないと言えるだろう。

## 5.2 現状と希望について

5番の「よく普通体会話を使っている⇔普通体会話はあまり使わない」という質問に対しては、平均値が2.8であり、選択肢1と2を選んだのは全体の40%に上った。JFLの環境下でも半数以上の学習者が普通体会話を使っていると意識していることは注目される。また、6番の「普通体会話をうまく使えるようになりたい⇔使えるようになりたいとは思わない」という質問についてだが、選択肢1或は2を選んだものが71%を占め、大部分が普通体会話を使えるようになりたいと考えていることが明らかになった。その反面、選択肢4を選んだ者が8%おり、少数派とはいえ、それほど普通体会話を学びたいとは感じていないグループも存在している。

## 5.3 丁寧体会話との相違について

7番から9番の質問は、丁寧体の会話と普通体会話との違いが十分認識されているかどうかを主に調査するものである。7番の使用文型・語彙の違い、男女差について、学習者の平均値は2.23だったが、9番のイントネーションの平均値は2.64と有意に数値が大きく

( $t=-6.011$ ,  $df=339$ ,  $p<.01$ )、普通体会話のイントネーションには比較的難しさを感じていないことが分かった。この点においては有意差は見られなかったものの、教師も同じような傾向が見られた。丁寧体会話と比べて普通体会話は疑問を表す終助詞を使わないことや、一発話が短いことなどから、イントネーションなどの音声コントロールが重要になってくることが指摘されている（増田ほか 2006）が、この調査からは台湾の大学生学習者が普通体会話のイントネーションに困難を感じているとは言い難い。ただし、本当にうまく使えているのか、ただ単に認識が足りないのかはわからず、今後の実態調査と照らし合わせる必要がある。

#### 5.4 混合と使用場面の理解について

学習者の発話では丁寧体と普通体の混合は非常に多いとされている（山下 1989、増田ほか 2006）<sup>6</sup>。また、どの場面で普通体会話を使うべきなのかという問題についても、判断に困ることが想像される。10番と11番の質問ではそうした普通体会話の困難点についての認識を問う質問となっている。

まず、10番の「丁寧体と普通体会話が混じってしまいそうだが使い分けはうまくできている」という質問に対しては、学習者の平均が2.85だったのに対し、教師は2.27で、有意な差が見られた( $t=2.99$ ,  $df=371.00$ ,  $p<.01$ )。つまり、学習者は比較的正しく使い分けができていると認識しているが、教師から見ると学習者の使い分けは十分ではないと感じていることになる。

また、11番の「どんな場面で普通体会話を使えばいいかわかるか」という質問に対しては、学習者の平均値は2.55、教師は3.12で、こちらも有意な差があった( $t=-2.35$ ,  $df=35.43$ ,  $P<.05$ )。こちらも同様に、学習者は自

---

<sup>6</sup> 実際の母語話者の会話では、丁寧体を使用している場面でも自らの心情を表現する場合など、独話的に普通体を用いることもあり、逆に普通体を使用している場面でも会話技巧として丁寧体を使用する場合もある。本研究ではこうした意図した混用ではなく、誤用として普通体会話の中で丁寧体を用いたり、または丁寧体会話の中で普通体を用いる場合を指すものとする。



分ではどの場面で使えばいいのかわかっていると認識しているが、教師は学習者の理解はそれ程ではないと認識していることになり、両者の認識には差があることを示している。

これは、学習者が使用する普通体会話に対して、教師は間違いが多いと感じており、より正確に普通体会話を使ってほしいと期待していることを示唆している。

### 5.5 必要性について

12番と13番は普通体会話の必要性についての質問となっている。まず、12番の「普通体会話のほうが丁寧体会話より重要だ⇔丁寧体会話のほうが必要だ」という質問に対しては学習者の平均値は約3.29（選択肢1及び2：10%、選択肢4及び5：33%）、教師の平均値は約3.27（選択肢1及び2：15%、選択肢4及び5：37%）となっており、ともに中間値の3より若干大きく、教師、学習者ともに普通体会話より丁寧体会話が必要だという認識が若干強いということがわかった。

13番の「人間関係の構築には普通体会話が必要だ⇔人間関係の構築には丁寧体会話が必要だ」という質問に対しては、学習者の平均値が1.97、教師の平均値2.76で有意差があった( $t=-4.88$ ,  $df=36.08$ ,  $p<.01$ )。

つまり、教師も学習者も丁寧体会話のほうが重要だという認識が強いが、人間関係の構築に対しては普通体会話のほうが重要だと感じており、学習者のほうがよりその度合いは高いということになる。

### 5.6 教授方法について

14番から17番の質問は普通体会話に対する教授方法や教授順序に関する問題である。14番の質問は「日本語学習の最初から普通体会話を教えるべきだ⇔丁寧体会話の後に教えるべきだ」というもので、学ぶ順序に対してどのように考えているのかを問う質問である。結果は学習者3.61（選択肢1及び2：13%、選択肢4及び5：56%）、教師3.76（選択肢1及び2：9%、選択肢4及び5：67%）と学習者、教師ともに高い値となり、現状の丁寧体、普通体という順序を支持

している結果となった。

15番、16番の質問は、普通体会話を学ぶのにどのような学習ストラテジーが適切かを問う質問である。15番では「アニメやドラマを通して勉強するのが効果的だ⇔授業で教えてもらうのが効果的だ」というもので、16番は「実際に友達を作って学ぶのが効果的だ⇔授業で教えてもらうのが効果的だ」である。15番では、学習者 2.24（選択肢1及び2：64%、選択肢4及び5：11%）、教師 2.48（選択肢1及び2：58%、選択肢4及び5：15%）と、授業よりアニメやドラマで学んだほうが効果的だと考えており、16番では学習者 1.9（選択肢1及び2：77%、選択肢4及び5：1%）、教師 1.8（選択肢1及び2：82%、選択肢4及び5：3%）と、実際の友達を作ることがより効果的な習得方法だと認識していることが明らかになった。つまり、自然習得のほうが教室習得より効果的だという意識があると考えていることになる。また、学習者の15番と16番の平均値、教師の15番と16番の平均値を、比較すると、学習者（ $t=5.806$ ,  $df=339$ ,  $p<.01$ ）、教師（ $t=3.218$ ,  $df=32$ ,  $p<.01$ ）ともに、16番のほうが数値が有意に高く、この三つの学習方法は、実際の友達を作ること、アニメやドラマを見ること、授業で習うことという順序で効果的だと考えていると言える。

17番の質問は、大学で普通体会話を教えるべきかどうかを問うもので、平均値は、学習者は 2.0（選択肢1及び2：79%、選択肢4及び5：3%）、教師は 1.8（選択肢1及び2：73%、選択肢4及び5：4%）と中央の3から離れた値が見られた。学習者も教師も大学でも教えるべきだと考えていることがわかった。

15、16番の質問では自然習得のほうが効果的だと意識しているのに対し、17番の質問では大学でも教えるべきだという意識ももっており、一見矛盾する結果となった。この解釈としては次の二点が考えられる。

1) 実際に使う場面で自分の話し方が不自然ではないかという不安

を感じており、否定的証拠<sup>7</sup>を求めている可能性がある。

- 2) より実践的な場面のほうが効果的だと考えているものの、授業でしか得られない物も補完的にあると考えているのではないだろうか。

## 5.7 まとめ

上述した結果に基づき、教師と学習者の普通体会話に対する意識は、次のようにまとめられる。

- 1) 普通体会話などを含む実際に使われている日本語は、映像や文字から受動的に接触する機会は多いが、一方自分が実際に使用し、積極的に使うことはまだ少ない。
- 2) 少数派ではあるが、普通体会話を学びたくないとは感じているグループも存在する
- 3) 教師も学習者も、普通体会話の使用文型・語彙の違いや男女差に比べて、イントネーションはそれほど難しいとは感じていない。
- 4) 普通体会話と丁寧体の混合や、普通体会話を使う場面の理解では、学習者の認識は教師より甘い。
- 5) 普通体会話より丁寧体会話のほうが重要だという意識があるが、人間関係の構築においては普通体会話のほうが必要だという意識のほうが強く、特にその傾向は学習者において強い。
- 6) 丁寧体会話が先で、普通体会話が後、という学習順序が支持されている。
- 7) 普通体会話の学習法として、実際に友人を作って学ぶ、アニメやドラマを通して学ぶ、授業で学ぶという順序で支持されている。
- 8) 大学教育でも普通体会話を扱うべきだと考えている。

## 6. 結論

アンケートで得られた結果をもとに、学習者の普通体会話に対する現状と、今後の向うべき方向性について次のようにまとめ、提言

---

<sup>7</sup> ある表現に間違いがあるということを示す情報。ここでは発話の誤りを教師に指摘・訂正されることを示す。

する。

#### 1) 潜在的な需要や意欲が存在している

実際に日本人と交流を行っていると答えた学習者は少数派だったが、その一方で、よく普通体会話を使っているかという質問に対しては肯定的な回答のほうが多く、若干矛盾する結果となった。これは、日本人との会話ではなく、学習者同士のおしゃべりや、独り言などで普通体会話を使っていると考えられ、相手が日本人ではなくても積極的な普通体会話の使用が想定される。これは、アニメ、漫画やドラマなどの視聴により、こうした現象が引き起こされた可能性がある。

普通体会話の使用に直面しているという状況はまだ少数派であり、しかも、学習者は優先的に普通体会話の学習を考えているわけではない。しかし、7割以上の学習者がアニメやドラマなどから普通体会話に頻繁に接触し、大多数の学習者がで普通体会話をうまく使えるようになりたいと考えていることを考えれば、潜在的な需要や意欲は一定の割合で存在すると考えられる。

#### 2) 人間関係の構築に普通体会話が必要と考えている

人間関係の構築に、学習者も教師も普通体会話のほうが丁寧体会話より必要だと考えていることが分かったのは、注目に値する。丁寧な言葉というものは、「相手に丁寧に接し、人間関係をスムーズにするもの」とされているが、見方を変えれば「差しさわりなく相手に接するもの」という一面もあり、「いかに本音を話し、近く深い関係に持ち込むのか」という人間関係の構築とは、逆のベクトルである場合も多い。調査対象者もこのことに気づいており、人間関係の構築に普通体会話が必要という意識があるようだ。教師より学習者のほうがこの意識が強いのは、個人交流やアニメやドラマで多くの普通体会話に接していることや、若者同士の人間関係を想定しているからかもしれない。いずれにせよ、こうした意識があることは、普通体会話を学ぶ上で重要な動機となるだろう。

#### 3) 普通体会話は中級以後に授業を行うのが妥当

今回の調査で、大学日本語教育に取り入れるべきだという意識は非常に強く、「普通体会話をうまく使えるようになりたい」という学習意欲は強いものの、丁寧体会話のほうが普通体会話より重要であり、教える順序も丁寧体会話の後に普通体会話が来るべきだという意識を持っていることが明確になった。こうしたことから、普通体会話は、丁寧体会話をひと通り終えた中級以後に導入するのが、学習者、教師の意識に合っているとと言える。大学教育で言えば、2, 3年生時に導入するのが適当だと考えられる。

また、普通体会話は教室習得より、実際の交友関係やアニメやドラマを通して学ぶ自然習得のほうが効果的だと意識しており、授業でもできるだけ、それに近い方法を教室活動に取り入れるのは有効だと考えられる。因・王（2007）や増田ほか（2006）では普通体会話の教授について、文脈のまとまりのある単位で情報を提供すべきだと提言しているが、文脈のあるドラマなどの場면을授業で使うことは有効な教授手段で、学習者にとっても受け入れやすいと考えられる。

#### 4) 正確な普通体会話を身に付けるまで、教師の指導が必要である

実際の日本人との接触があるのは少数派であるが、アニメやドラマなどを視聴するのは7割に上り、普通体会話の受動的なインプットをかなりの量、得ていると考えられる。ただ、受動的な言語接触だけではそのセリフの意味が分かれば事足り、否定的証拠が提示されることはないため、こうした学習環境下で学習者は間違った知識を持ち続けている可能性がある。実際、普通体会話と丁寧体会話の混合や使用する場面の理解について学習者と教師とは意識の差があり、学習者が自分で思っているほど普通体会話ができている可能性が大きい。こうした状況を改善するためには、否定的証拠を提示する機会を与えるような授業設計が必要であり、自然習得だけではなく教師による指導は必須である。具体的には、学習者の主体的な会話作成とその振り返りなどの教室活動が挙げられる。ただ、実際に学習者がどのような普通体会話に関する間違った知識を持ってい

るのか、教師はどのように指導すればいいのかなどは、別の研究で考え、検証する必要があるだろう。

## 7. おわりに

教師と学習者の信頼関係が構築されなければ、真の教育、真の学習は行えないと考えられる。今回は普通体会話に対する意識調査で両者の間の類似点、相違点がある程度把握できた。また考察を通して、双方の態度、理念のギャップを埋めるべく、理想的な指導の方向性を提案した。総じていえば、普通体会話教育に対する学習者や教師の意識は肯定的で、特に人間関係の構築に必要だと考えていることがわかった。また、普通体会話より丁寧体会話のほうが優先的と考えているものの、大学教育でも取り扱うべきだという意識も強かった。こうしたことから、大学教育でも普通体会話を中級以上で導入することを提言した。

本研究は普通体会話教育の実施を指向するものであり、意識調査に加えて、実際の普通体会話教育の実態、学習者の普通体会話における能力の調査、教えるべき学習項目を明らかにしなければならず、これらが今後の課題となる。

また、今回の調査は台湾のA大学一校に限られた調査であり、台湾の大学日本語教育全般、あるいはJFL全般について述べるには、更なる調査が必要とされる。

## 参考文献

- 石川朋子 (2012)『くだけた会話の教育方法開発のための基礎研究—若年層の韓国人日本語学習者を対象として—』九州大学博士論文
- 梅岡巳香・宮城徹 (2004)「会話教育への一提言」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』30、東京外国語大学、pp. 201-216
- 小川早百合 (2004)「話し言葉の男女差—定義・意識・実際—」『日

- 本語とジェンダー』4、日本語ジェンダー学会、pp. 26-39
- 小出詞子 (1972) 「日本語教育について」文化庁編『日本語教育指導参考書 3 日本語教授法の諸問題』、大蔵省印刷局、pp. 219-274
- 鈴木雅光 (2013) 「規範文法はなぜ滅びないのか」『東洋大学大学院紀要』49、東洋大学大学院、pp. 405-421
- 高村めぐみ・内藤真理子 (2015) 「関西方言に対する短期留学生の意識調査」『日本語教育方法研究会誌』22(2)、日本語教育方法研究会、pp. 18-19
- 因京子・王龍 (2007) 「日本語教材の普通体会話の提示と会話実例の質的分析—若い男性話者による会話を中心に—」『東アジア言語文化研究』8、東アジア言語文化研究会、pp. 139-166
- 富阪容子 (2005) 『新装版 なめらか日本語CDつき』アルク
- 西口光一 (2008) 「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』138、日本語教育学会、pp. 24-32
- 早野慎吾 (2008) 「地域のことばと日本語教育—宮崎で日本語を教える人のために—」『にほんご：日本語を学ぶ・宮崎を学ぶ：多文化共生時代の地域日本語支援』、宮崎県国際交流協会、pp. 97-108
- 堀口純子 (1989) 「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文藝言語研究. 言語篇』15、筑波大学、pp. 99-121
- 増田真理子・本郷智子・中村かおり (2006) 「カジュアル会話、なぜ教室で扱うか、どう教えるか—研究留学生に対する会話教育の一環として—」『日本語教育方法研究会誌』13(2)、日本語教育方法研究会、pp. 58-59
- 山下秀雄 (1989) 「日本語教育における初級と待遇表現」『日本語教育』69、日本語教育学会、pp. 11-23

